

2021年2月に想う

吉田 順年

株式会社スタジオノイエ 代表取締役
大阪デザインセンター 理事

財団法人大阪デザインセンター60周年、おめでとうございます。

この節目に立ち会え、皆様とともにお祝いできることを大変ありがたく、また心からうれしく思っています。

この原稿を書いている現在、日本また世界中で新型コロナウイルス蔓延騒ぎが一年以上続いています。多くのデザイン事業者もこれまでにない影響を受けている様子です。私ごとで言えば、得意先とはネットで受注・提案のやり取りをし、在宅勤務の社員とも、その連絡は当然遠隔でやらざるを得ない。どうなることかと考えもしたが、これまでも東京や地方、まして海外事務所とは、その方法でやっていたわけで、ほぼ全てをそれでいざやってみれば、案外どうってことなかったりする。変わっても良さそうなことを、変えられずにいた、また、背中を押されなければ、変わることができなかったことを反省しながら、周りの様子を伺う毎日が続いています。

感染症が蔓延を続ける過程において、「不要不急」という言葉が頻繁に使われました。『「医療」と「経済」のバランス』というフレーズも国会をはじめ、多くのメディアで連日報道されています。「医療」関係の仕事に関わられる方々の献身的な対応には、発生以来連日、頭の下がる思いで一杯ですが、「経済」で真っ先に取り上げられたのは「観光」であり「飲食」の業界だったという印象です。そこに関わる人たちの数や影響から当然なのかもしれませんが、残念ながら我々「デザイン」業界は、ここでも話題になることはありません。「その他特定サービス産業」の一領域として位置付けられている以上、当たり前といえばその通りですが、気になることは、まさか「不要不急」の仕事と捉えられていないかということです。仮にデザイン業界全体としてマイナスに振れていたとすれば、企業の設備投資や住宅着工戸数、さらに広告出稿量などのあらゆる関連指数を注視しつつ、これが杞憂に終わればいいなと思っています。

今年は、延期された「東京オリンピック・パラリンピック」が開催される予定になっています。あいにく世界的におさまりを見せないコロナ禍にあって、延期したもののそれでも開催を危ぶむ声が上がっています。振り返ってみれば8年前に東京での開催が決定されてから今日まで、競技以外の話題をこれほど振りまいている大会は思い当たりません。開催半年を切った今でも、組織委員会の会長が「不適切発言」を理由に、交代されるそうです。デザインに関わりのある話題もいくつかありました。「新国立競技場建設計画コンペ」については、一度決定がひっくり返っているし、「東京オリンピックエンブレム」でも、騒動が起これり、あらためてコンペがなされたと思います。そんな情けない話題の多かった中で、大阪を拠点に活躍されるSDAの川西純市氏がデザインされた「東京オリンピックメダル」が採択されたことは、誠に痛快な、嬉しいことでした。あらためてそのデザインを拝見すると、いかにAIが発達しようと、機械なら「こうはならないよなあ」という、「人のデザイン」を感じます。私だけでしょうか。

今日「デザイン」という単語は、想定外の様々な場面で使われるようになってきたと感じています。私自身はその傾向を、概ね好意的に受け止めていますが、そのことを、まるで専門領域を侵食されるかのように、真っ向から否定する人たちがいることも承知しています。ならば「デザイン」を的確に説明しろと言われても明確な回答をいまだに

持ちません。強いて言えば「捉え方」「考え方」「描き方」などというような極めて抽象的な言葉でしか説明できないのです。それでも、おそらく10年後は、さらに広義な意味で使われているのではないかと想像します。加速度的に進む情報処理技術や人工知能の発達によって、「類似」まして「模倣」など過去のモノとなってしまうし、「小綺麗なだけのアウトプット」であれば機械が達者に処理しているに違いないと想像します。

「サイエンス」という単語に加え「エビデンス」という言葉は、今回小学生も覚えたのではないのでしょうか。また、感染症に世界が苦しむなかにあつて、地道な「科学の基礎研究」が大きく社会に貢献していることも、あらためて感じたのではないのでしょうか。「デザイン」にも端から結果や成果を求めない「基礎研究」の分野があればいいのにと常々考えてきました。計算機が「過去の判例を積み上げ、客観的な判決を下す」「難病に対して、過去にない有効な処方を見つけ出す」そんな将来も予測される中で、「人によるデザイン」に何が残るのかを考える時があります。

大阪デザインセンターが「将来のデザイン」すなわち「社会貢献のためのデザインの基礎研究」にもっと投資してくれないかなあ、そんな寝言のような、はかない夢を、ぼんやりと抱いています。

